

2020年11月15日 礼拝説教要旨

詩編講解説教36「あなたの光に光を見る」

詩編36：6～10、Iヨハネ1：5～7

詩編第36編には、神さまの壮大なイメージが幾つも認められます。6節にある「天」「大空」というのは、限りなく広がる天空の世界を想像することができます。また7節には「山」が出て来ます。聖書では、山というのは神聖な場所とされています。ノアの箱船が漂着したところがアララト山、アブラハムがイサクを捧げたところがモリヤの山、モーセが十戒を与えられたのはシナイ山です。山は神さまに近い場所なのです。主イエスもよく一人山で祈られたことが福音書に記されています。天や山というのは、上へ向かって開けるイメージがあります。

一方でここに「大いなる深淵」とあります。深淵とは「たくさんの水」という意味の言葉ですが、深い海の底というようなどこまでも深く沈んでいくような世界です。創世記の「闇が深淵の面にあり」（1：2）というのは深い闇の世界であり、旧約聖書では、深淵を「陰府」と関連づけることもあります。そのように深淵は下へ向かうイメージがあります。

高い山から深淵、陰府の底まで、神さまの慈しみ、真実は上から下までの広がりをもっている。全てを網羅していると言ってもよいでしょう。詩編に「どこに行けばあなたの霊から離れることができよう。どこに逃れれば、御顔を避けることができよう。天に登ろうとも、あなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます」（139：7～9）とあります。パウロも「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるか」（エフェソ3：18）と言います。それほどに神さまの懐は大きいのです。その中にわたしたちは捕らえられています。

そしてこの救いを表しているのがイエス・キリストの十字架とよみがえりの御業です。十字架の上で主は「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれました。ここに神さまから捨てられるという陰府の世界があります。十字架においてキリストはその深淵の底、陰府の世界に降られた。そこに捕らわれているわたしたちを見つけ出し救われるためです。そしてキリストは三日目によみがえられました。深淵から今度は天へ、神さまのご支配の中へわたしたちを引き上げてくださった。このように天の高みから深淵の深みにまで及ぶ神さまの慈しみの中にわたしたちは捕らえられ、救われるのです。

そしてその神さまの懐の中で守られ満たされていく様子が8節以下のところに記されます。「翼の陰に」という部分は17編の「瞳のようにわたしを守り、あなたの翼の陰に隠してください」（17：8）を思い出すでしょう。ちょうど母鳥が雛を翼の下に置いて守るイメージがあります。雛にとってそこは外敵から身を守る場所であり、安心以外の何ものでもありません。神さまのところに平和、平安の源があります。そしてまたそこはわたしたちの魂が満たされ養われるところでもあります。「恵み」と訳された言葉は原文では油という言葉です。豊かな食べ物で肥え太ることがイメージされています。また「甘美な流れに渴きを癒す」この「甘美」はエデンという言葉の複数形です。かつて神さまのもとに何ん自由なく満たされていたアダムとエバの姿を思い起こすでしょう。神さまと共にあることがわたしたちの最大の幸せであり、平和であり、喜びなのです。

しかし、その豊かさの源泉である神さまからわたしたちは離れてしまいました。その結果、わたしたちは貧しく、心の狭い者になってしまったのです。先ほどのような神さまの懐の広さに比べ、わたしたちの何と懐の小さいことでしょうか。神さまから離れているがゆえに、自分という小さな枠でしか物事を捉えられなくなっております。罪というのは、根本的に他者を失うことです。大いなる他者である神さまを失い、そして隣人という他者を失う。そうすると人の心は本当に貧しく、狭いものになってしまいます。

現在のコロナ禍は人との接触を避けさせ、強制的に他者を失わせる悪魔的な働きを感じます。意識的に交わりを保っていかないと、人はますます孤立を深めていくでしょう。他者を失うことで、人は独善的になり、自分の狭い価値観の中で、勝手に人を評価したり裁いたりするようになります。不寛容な社会と言われます。コロナ差別という実態がある。「マスク警察」とか「自粛警察」というような自分の判断だけで安易に人を裁くようなことがあります。相手の立場や気持ちを想像することができない。だから自分の正義感だけで一方的に裁くのです。このような時代の中で人の心はどんどんやせ細っていくでしょう。殺伐とした社会になっていきます。ウイルスも心配ですが、そういう人の心の方が心配です。

けれども、わたしたちにはイエス・キリストの救いがあります。キリストによってわたしたちはもう一度神さまの恵みの豊かさの中へ、あのエデンの園へ帰ることができるのです。そのためにキリストは十字架とよみがえりの御業をもって陰府の支配から天、神さまのご支配へわたしたちを移してくださいました。10節にある「命の泉」も「光」もキリストを思い起こすでしょう。「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(ヨハネ4：14)「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(ヨハネ8：12)

「あなたの光に、わたしたちは光を見る」(10節)とあります。「光を見る」とありますが、これは生きることを意味します。神さまの光によって、その光の中で人は真に生きるのです。魂が健やかであると言ってもよいでしょう。では神さまの光に照らされて生きるとは具体的にどういうことでしょうか。それは人生の奥行きが見えてくるということではないでしょうか。人間はある一面しか見えていません。表面的なことではしか評価できません。でも神さまの光はすべてを照らすのです。その人の背後にあるものまで照らし出す。先ほども触れましたように神さまは懐が深いのです。広がり、奥行きがある。その神さまの光によってわたしたちの生き方にも広がり、奥行きが与えられる。ただ一面だけで人を評価したり、自分を嘆いたりしない。神さまの光がそれを可能にします。

時々、思い起こす聖書の御言葉があります。「キリストはその兄弟のために死んでくださった」(ローマ14：15)これはパウロが人を裁かないようにという教えの中で述べていることです。わたしたちは自分の小さな正義感を振りかざし、人を裁くのです。その人を知りもしないで、一方的に、狭い一面だけを見て。でもパウロはそこで言うのです。「キリストはその兄弟のために死んでくださった」と。わたしたちが平気で裁く一人の人のためにキリストは死んでくださった。そのことを思うときに、わたしたちは安易に人を裁くことから自由になるのでしょうか。それが神さまの光によって光を見る、わたしたちの新しい生き方です。